

博慈会 老研一口伝言

—未病は、戦乱を越え、日本を経て中国へ“逆輸入”された？—

「未病」という言葉は、いま新しい健康概念のように語られることがあります。その源流は実に約 2000 年前、後漢時代に編まれたとされる『黄帝内経』に見られます。この古典には、「病気になる前の未病を防ぐのが名医」という思想が記されており、まさに未病の原点ともいえるものです。

ところが皮肉なことに、その本家本元である中国では、度重なる戦乱や焚書によって原典の多くが失われていきます。幸いなことにこの「黄帝内経」は遣隋使、遣唐使らにより写本され日本に運ばれ今でも仁和寺に国宝として保存されております。しかし「未病」は言葉として残っても、血液検査もレントゲンも無かった時代ですので、未病医を職業として発展させるまでには至りませんでした。

一方、日本ではこの思想は続き、江戸時代には貝原益軒の『養生訓』の中で、未病の養生の重要性が説かれております。有名な「腹八分」はメタボ予防の正しく未病ケアです。つまり、日本は“未病思想の避難所”のような役割を果たしていたとも言えるのです。

● もし、小泉純一郎総理大臣が靖国神社を詣でてなかったら。

その後、中国では近代に入り、特に毛沢東時代には伝統思想の多くが抑制され、「未病」という概念も完全に表舞台から遠ざかりました。しかし 2005 年、歴史は思わぬ形で動きます。当時の中国副首相・呉儀 (Wu

Yi)、彼女は小泉純一郎総理の靖国神社参拝に反発し、予定されていた会談を突然キャンセルしました。あの“鉄の女”です。

けれども、呉儀副首相は「転んでもただでは起きません」。日本との関係を調べて行く内に日本においては既に日本未病システム学会が出て来ており、活発化していることに注目したのです。

そして、日本で再評価されていた未病概念を中国へ“逆輸入”したのです。そしてあつという間に「治未病センター」を中国全土 200 箇所に造ってしまいました。

歴史のいたずらとは面白いものです。もし小泉総理が靖国参拝をせず、呉儀副首相との会談が平穩に終わっていたら——中国における未病復興の流れは、少し違っていたかもしれません。

つまり、未病は中国で生まれ、日本で守られ、日本で再興し、中国へ戻ったともいえるのです。そして今、その未病を「未病在民 (未病を治すのは名医ではなくて一般人)」として再定義しようとしている日本。歴史は巡りながら、新しい使命を私たちに問いかけています。未病とは、消えなかった思想である。そして今、それを AI を活用し未来の社会制度へ育てる番なのかもしれません。 (老人病研究所 所長 福生吉裕)

